

自然治癒力への信頼

子どものころ、近くの林でよく蟬（せみ）捕りをした。そこに行くには牧草地を横切るが、この場所で草刈りする父は毎年マムシを捕まえた。そこを草履（ぞうり）で歩くのだから、こんなことがよくできたものだ。親に注意された覚えがないし、他の子もそうだったから、それが「普通」だった。まだ貧しい時代のことである。

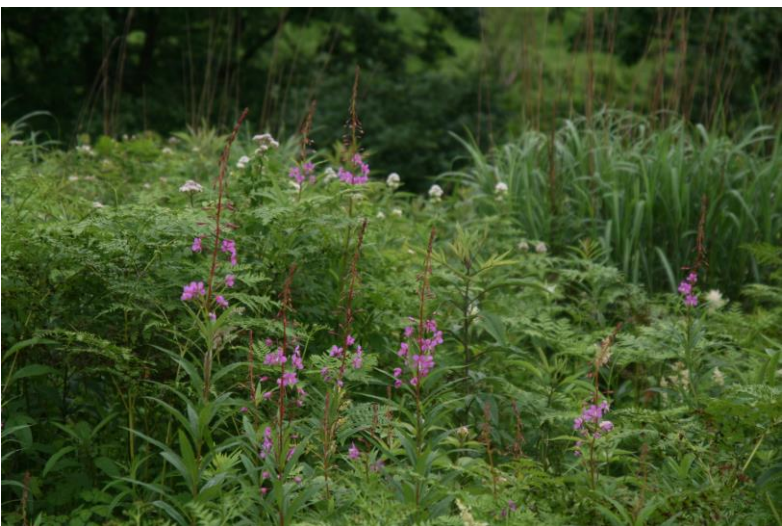
そのころ、子どものケンカに親が介入するのは恥という感覚があった。その感覚は大人だけでなく、子どもにもあったような気がする。よほどのいじめでない限りそれが「普通」であった。

それからの半世紀、その「普通」が激変した。その変化の中で、「自然治癒力」への信頼が薄らいだことに私は注目している。

野山で遊んだ毎日、擦り傷、踏み抜き、切り傷など生傷いっぱいの日々だった。けれど手当らしいこともしないのに自然治癒した。自分の身体に宿るその不思議な力への信頼が親子共々にあったのだろう。心の傷でさえ、その不思議な力が癒した。

なぜこの力に、それほどの信頼感があつたのだろうか。貧しさゆえそれを信じるしかない事情もあった。けれど、恵まれた自然、濃密な人間関係に支えられていた。私たちを支えるその基盤が、自分や子どもを信じる力になっていたのではないか。

患者を「信じる力」のある医師が名医だと聞く。この力が治癒力を活性化するからだという。…この説が正しいのなら、教育の再生には、もう少し子どもや教師への信頼が大切である。不安を動機として動くとき空回りが多い。これは長年相談を担当してきた私の気づきである。



沢田の杖塾 主宰 森 口 章

(二〇〇七年 六月二十八日夕刊掲載)